

青年期の劣等感に関する研究

— self-discrepancy との関連から —

井 上 健 吾

青年期における人間関係は他者とのかかわりを通して成立するといっても過言ではない。その中で青年は他者と自分、さらに理想と現実との間で生じる感情をめぐってさまざまな内的過程を發展させていく。その一つに他者との比較によって自分を「劣っている」と感じる感情、劣等感がある。人が発達していく過程でこのような他者と自分を比較することは「自分は誰であるのか」、「自分はどのような人であるのか」という自分に対する定義（自己概念）を構築していく助けとなると考えられる。劣等感はいわば自らを定義していく過程で生まれる感情として理解することもできるのである。

ところで劣等感がそのような「他者との比較」から起こる感情として捉えられている一方、劣等感を初めて概念として提唱した Adler, A は劣等感を自分についての理想と現状評価との乖離の感覚であると述べており、近年の劣等感を扱った研究でもそのような理想とする自分（理想自己）と自分自身への現状評価（現実自己）との関係から劣等感を捉えなおそうとする動きがある。他者に対して「劣っている」と感じた際にそのような自らの理想や現状はどのように関係しているのだろうか。

一方、近年の自己研究においては、法則定立的方法に被験者にとっての重要な側面を考慮する個性記述的観点を組み込んだ方法論がある。劣等感に関しても、どのような人でも全く同じ部分に劣等感を抱くのではない。例えば「もっと身体的魅力が欲しい。」と思っている人と「もっと学業成績を上げたい。」と思っている人では他者とくらべる領域も必然的に変わってくるであろう。その結果、劣等感を感じる領域も変わってくると考えられる。

以上のような問題から、本研究では理想自己と現実自己、他者像という三つのズレという観点から劣等感を分析し、さらに重要領域におけるズレとの関連から青年期における劣等感の様相を明らかにするという目的で、高坂（2008）の劣等感尺度と遠藤（1992 b）の自己認知尺度を用いて検討した。

その結果、青年期においては理想自己、現実自己それぞれよりその間のズレのほうがより強く劣等感と関連しており、理想と現実のズレが大きくなればなるほど劣等感も強くなるという結果が示唆された。さらに個人にとって、重要な領域での理想と現実のズレはそうでない領域での理想と現実のズレより劣等感と深くかかわっているということが示された。また男性では負の理想自己が自己評価に影響を与える領域として優勢であり、女性では正の理想自己が自己評価に与える影響を与える領域として優勢であることが示された。劣等感をこのような理想と現実、他者像との乖離と考えるならば、それらは「青年期において他者と比較することで、自己を見つめ、自己を形成していくプロセス」の一つとして考えられる。

今後の課題として、劣等感尺度のさらなる検討、より無意識的な劣等コンプレックスについての研究、精神病理との関連性の検討があげられる。